豫楽院　近衛家熙公年譜稿（三）

緑川　明憲

本稿は、前号（『京都大学國文學論叢』第二十四号）所載の蕪稿「豫楽院　近衛家熙公年譜稿（二）」の続きである。凡例については、前々号（第二十三号）を参照されたい。

［凡例追加］

本号以後、年譜作成の典拠とすることが多かった左の書物を、略記の形で示すこととする。

（綜考）＝小笹喜三『書道大師流綜考』（昭和十六年刊）

（実紀）＝林述斎監修『徳川実紀』（『新訂増補国史大系』所収、平成十一年刊）

［附記］

この年譜の作成にあたり、資料などの閲覧を常に快く認めて下さいます、財団法人陽明文庫　文庫長の名和修先生に厚く御礼申し上げます。

宝永六年（一七〇九）己丑　四十三歳　**従一位摂政**

●一月十一日、嫡子の家久とともに、父の基熙へ詠草の添削を依頼。（基熙）

●一月十三日、仙洞（霊元院）御会始に出詠。添削なし。題「春雪似花」（御詠草／函架番号六一九三七ほか）

●二月七日、禁中（東山院）御会始に出詠。添削なし。題「鶴有遐齢」（御詠草／函架番号六一八七七ほか）

●四月十二日、東山院より「詞事哥」一枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）

●四月十六日、東山院より巻物一巻の書写を命ぜられる。（雑事日記）

●四月十九日、東山院より色紙二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）

●五月三日、東山院より色紙三枚が到来。（雑事日記）

●五月八日、三日に命ぜられた色紙三枚とともに色紙五枚を書写して東山院へ献上。（雑事日記）

●五月十日、山城・乙訓郡大原野村にある小塩山勝持寺の僧義全が参上、勝持寺所蔵の小野道風筆とされる額を見る。義全より礼として枇杷一箱を献上、その際、箱や袋の修復を約束した。（雑事日記）松平定信編『集古十種』に所載される本堂の額「勝持寺」額（道風筆とされている）が、これに該当するか。

●五月十四日、辰刻、相国寺へ出掛け、客殿で新内裏に設置す

る賢聖障子の草案を試し掛けする。（雑事日記）
●五月十八日、東山院より色紙二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●五月二十二日、霊元院より「八景巻物」三巻の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●五月二十四日、霊元院より巻物二巻及び色紙二枚の書写を命ぜられる。このうち、色紙は断る。（雑事日記）
●五月二十五日、絵師の狩野洞春及び同宗春が来邸。絵を描くことを命じ、その様子を見る。（雑事日記）
●五月二十七日、霊元院より色紙二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●六月七日、皇太子慶仁親王受禅における家熙への祝儀（将軍徳川家宣より太刀銀五十枚）、江戸を発つ。（実紀）
●六月十八日、「御台所にて御叙位あるは、先々いまだ例なし」という中で、姉で将軍御台所の熙子が従三位に叙せられる。（実紀）
●六月二十一日、仮皇居（＝今出川の近衛家本邸）で東山院が譲位し、皇太子慶仁親王が受禅（＝中御門院）。これに伴い、関白を改め摂政となる。（家譜・『続史愚抄』）
●六月、下野・那須郡湯津上村にある「那須国造碑」の考証文を執筆。「右那須国造碑。在下野那須郡湯津上里。按唐武后永昌元年。歳在己丑。而当持統三年。此時本邦年号闕。故仮用異域年号乎。貞享四年之秋。水戸侯源梅里使人模印焉。今往々転写以伝世間。豈止使観者知当時之書。亦可以見其風俗之淳也。宝永六年己丑夏六月　家熙書」（陽明文庫蔵／函架番号九三〇三一①）ほかにもう一通草稿が現存するが、同じ時期に執筆された可能性が高い。「右那須国造碑、在下野那須郡湯津上里、碑云、永昌元年己丑四月飛鳥浄見原大宮那須造追大壹那須宣事提評督被賜、歳次庚子年正月二壬子日辰節、弥故意斯麻呂等立碑矣、然本朝無永昌号、飛鳥浄見原天武朝也、天武有朱鳥号也、朱鳥元年歳在丙戌而此日己丑則非朱鳥也、明暮今按唐武后永昌元年歳在己丑、而当持統三年此時本邦年号闕、故仮用異域年号乎、庚子年是文武四年也、蓋那須国造天武朝人物而展仕持統文武者也、凡上世碑碣今存于世者、此碑与陸奥壺碑也、而在荒墳茂草之間、無人識之者、爰水戸黄門光国（ママ）卿得獲此碑、印模諦正伝之末代、嗚呼好古之深者、忻々然於地下焉、進藤大和守泰通双鉤彼本而与予、幸甚不弁手足舞踏、加装軸聊誌其来由」（陽明文庫蔵／函架番号九三〇三一②）。②の本文中に見える進藤泰通は江戸の輪王寺宮公弁親王に仕えた諸大夫で、号は夕翁、室号は圭斎。詩集に『圭斎集』がある。泰通は遅くとも宝永年間には上洛し、近衛家に仕えていることが確認される。なお、当時進藤家の屋敷は柳之図子にあり、坪数は千三百二十八坪七合だった。（東京都立中央図書館特別文庫室蔵『近衛家本邸・別邸ほか敷地坪数等一覧』／函架番号木〇三二―二―一六）
●七月六日、辰半刻、子女を伴って菊亭家の屋敷へ移住。（雑事日記）
●七月十六日、熙子の叙位における家熙への礼（将軍徳川家宣より太刀銀三十枚、熙子より銀三十枚）、江戸を発つ。（実紀）
●七月二十四日、中御門院より外題二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●八月二十三日、新院（東山院）新殿御会始に出詠。添削なし。題「寄亀祝」。和歌懐紙も現存。管見では禁裏などの和歌御会

への出詠はこれが最後かと思われる。（御詠草／函架番号六一八七八）

●九月五日、院（東山院か）より殿上日給簡銘の書写を命ぜられる。十四日に草案を基熙に見せる。（基熙・雑事日記）

●九月十六日、賢聖障子銘の清書が完成、近衛家家司の中村一学を使いとして禁裏へ献上（全二十二枚、六ヶ所に足のついた桐箱入り）。基熙は家熙の清書が無事に成就するよう、清書が命ぜられてから毎月東寺への参拝（代参）を欠かさなかった。（基熙・雑事日記）

●九月十九日、絵師の狩野永叔が初めて来邸し、対面。（雑事日記）

●九月二十七日、内裏新造における家熙への祝儀（将軍徳川家宣より太刀銀五十枚）、江戸を発つ。（実紀）

●九月二十八日、賢聖障子銘献上の褒美として、禁裏より備州長船住盛景作の惣金作野太刀（鞘は沃懸地で牡丹唐草高蒔絵、目貫は金牡丹、柄は金打鮫皮、帯は藍革に五色の糸による牡丹唐草の刺繍、腕貫は「藍革露八角つりづり」）を贈られる。（基熙・雑事日記・秘鈔）

●十月十三日、将軍徳川家宣より大番頭の播磨守松平忠明を介して、賢聖障子銘清書の祝儀として銀百枚及び綿百把を贈られる。（基熙・雑事日記）

●十一月十六日、中御門院、仮皇居（＝今出川の近衛家本邸）より、新たに成った内裏へ遷幸。今回の御所の再建には費用が七、八十万両程かかる見込みであったことが新井白石の『折りたく柴の記』に記される（当時、幕府直轄領四百万石からの歳入は約七十六、七万両）。（『続史愚抄』）家熙は「馬術ヲ若キ御時ヨリ御好ミアリケル」（槐記）とあるように馬術に堪能であり、この時も騎馬で供奉した。なお、宝永の大火後、近衛邸は南側が増地され、総坪数は七千八十二坪六合となった。（東京都立中央図書館特別文庫室蔵『近衛家本邸・別邸ほか敷地坪数等一覧』／函架番号木〇三二―二―一六）

●十二月十七日、辰刻、東山院、疱瘡のため崩御。宝算三十五。「当時名医」が「尽術」した（基熙）が、回復は叶わなかった。家熙は宝永四年十一月二十七日からこの年六月二十一日まで、およそ一年半ほど東山院の関白をつとめた。（基熙・『続史愚抄』・『本朝皇胤紹運録』）

★此年、近衛家家紋の牡丹紋を仙台藩主の左少将伊達吉村へ下賜（使用を許可したことを意味するか）。（秘鈔）

宝永七年（一七一〇）庚寅　四十四歳　**従一位摂政太政大臣**

●一月九日、『般若心経』を楷書体で書写。（陽明輝光第三輯『豫楽院筆三体心経』）

●一月、藤原行成筆（家熙の極めによる）『小島切』を臨書。（『予楽院臨書手鑑』）

●二月十八日、基熙の太政大臣宣下における家熙への祝儀（熙子より綿百把及び二種一荷）、家久の疱瘡治癒における家熙への祝儀（二種一荷）、それぞれ江戸を発つ。（実紀）

●四月十八日、基熙、江戸城白木書院で将軍徳川家宣と対面。この時、家熙は基熙を介して家宣へ縮緬五十巻及び香包を贈る。（実紀）

●六月十六日、江戸滞在中の基熙、弘前藩主の越中守津軽信政と対面。信政の孫右京亮信興と権大納言醍醐昭尹の妹綱君とを

縁組みさせるべく、綱君を家熙の猶子とすることに決定。江戸からは飛脚をもって伝えられた。（基熙・雑事日記）
●六月二十五日、将軍徳川家宣よりの土用の見舞（塩鴨）、江戸を発つ。塩鴨は以後も土用の見舞いとして届けられていることが確認される。（実紀）
●七月五日、「暑気御尋」として、将軍徳川家宣へ学鰹・鮒鮓・昆布を贈る。（実紀）
●八月十三日、男児誕生。母はおつま。幼名は益君（まさ）。（『諸家知譜拙記』・『諸家伝』）
●八月二十二日、中御門院即位式の万歳旗清書を仰せつけられた上賀茂社社家の藤木甲斐司直（もりなお）が来邸し、対面。（雑事日記）司直は書道大師流の祖とされる藤木敦直の曾孫。司直の父生直より元禄九年九月三日に大師流の伝授を受けた家熙は、司直に正徳五年六月に伝授を授けるなどの経緯がある。なお司直は能書として認められ、享保十一年九月、江戸時代になって初め書博士に任ぜられた。（藤木司直『入木道注進』・『賀茂社家系図』・藤木司直墓碑銘・蕪稿「書道大師流における「甲斐守」」）
●八月二十六日、常子内親王の正忌に際し、大徳寺で法要を行う。供養料として銀五枚・茶一器・蒸籠二組を奉納。また西王寺へ『妙法蓮華経』七巻（ママ）及び供養料金五百疋を奉納。鯉二十匹の放生も行った。（雑事日記）
●閏八月十九日、前鹿児島藩主島津綱貴の七回忌に際し、『妙法蓮華経』一部を鹿児島藩京屋敷（錦小路通高倉西入ル）に詰める留守居役の若松十左衛門へ贈る。（雑事日記）
●十一月九日、礼服御覧。内蔵寮に保管される、即位式に用いる礼服及び冠を改める儀式を行う。（『中御門天皇御即位次第』）
●十一月十一日、中御門院即位式。家熙より新帝へ祝儀として太刀馬代銀一枚・樽・肴を献上。（『中御門天皇御即位次第』）また、この日即位式を拝見した新井勘解由君美（＝白石）に「存寄」を尋ねたところ、白石は「なにも〳〵申上べき様これなく候、御儀式今に相残り候事、恐れ乍ら感じ奉り候次第に候」と答えている。（宮崎道生氏『定本折りたく柴の記釈義』）
●十一月二十八日、以前より仙台藩主の左少将伊達綱村より所望されていた家熙手製の花生けを、連歌師猪苗代兼郁を介して贈る。（雑事日記）
●十二月十七日、鹿児島藩主島津家家中の島津周防守（久儔か）より唐筆二本・石摺・瑪瑙筆架などを贈られる。（雑事日記）
●十二月二十五日、太政大臣に任ぜられる。翌年初めに予定される天皇元服式の加冠役は、太政大臣がつとめるのが先例であったため。（雑事日記・家譜）
●冬、新井白石が来邸、白石に勘定奉行の近江守荻原重秀の「新恩」について尋ねる。（『折りたく柴の記』）
★此年、黄檗山万福寺舎利殿の後水尾院像前に、草書で書いた『般若心経』を奉納。（『黄檗文化人名辞典』）

正徳元年（一七一一）辛卯　四十五歳　**従一位摂政**

●一月一日、巳刻、中御門院元服式。加冠は家熙、理髪は左大臣九条輔実、能冠は内蔵頭山科堯言（たかとき）。この時、「此日まちかく龍顔を拝しけるこそありがたき事なれ」（『折りたく柴の記』）と述べているように、家熙の計らいによって新井白石が元服の式を拝見している。（家譜・秘鈔・『中御門天皇御即位次第』・『滋野井公澄日記』・『折りたく柴の記』）

●一月七日、中御門院へ御元服賀表を献上。賀表「臣家凞等言、冠居其■経礼之所、以先眼称其身古典、亦斯為美実成人之道、正体之基也、臣家凞等誠歓誠喜、頓首々々死罪々々、伏惟　皇帝陛下正膺暦数、高臨兆民、元服始加盛礼畢、已去幼志、寧待央■之頌盧善以動、豈頼良弼之力、治教偏布而四海、仰休明之化、仁恵厚施也、万姓沐恩波之深、祝聖算於千祀、享天禄於無窮、祥鳳来像瑞獣率舞、臣等仕恭股肱喜溢心顔、況拝天威于咫尺、敢効山呼於三振、不仕抃躍之至、謹奉表陣賀、以聞、臣家凞等誠歓誠喜、頓首々々死罪々々、謹言、宝永八年正月七日」（『中御門天皇御即位次第』）

●一月九日、新井白石が来邸。（雑事日記）

●一月十五日、新井白石が来邸、餞別として酒席を設ける。白石は深更に及んで退出。（雑事日記）

●一月十八日、中御門院即位における家凞への祝儀（将軍徳川家宣より銀百枚、凞子より銀五十枚）、江戸を発つ。（実紀）

●一月二十五日、鹿児島藩士の猿渡藤右衛門が来邸、藩主薩摩守島津吉貴より太政大臣宣下の祝儀として、太刀馬代黄金十両・紗綾三十巻・三種二荷を贈られる。島津又八郎・吉貴室などからも祝儀を贈られる。（雑事日記）

●二月六日、新井白石を介して、将軍徳川家宣へ『古本貞永式目抄』を贈る。（『新井白石日記』）

●二月七日、仙台藩主の陸奥守伊達吉村より太政大臣宣下の祝儀として、太刀馬代金一枚・一荷二種・綿百把、及び前年十一月に贈った花生けの礼として自筆の書状や菱喰一羽などを贈られる。吉村室からも祝儀を贈られる。（雑事日記）

●二月十一日、御広敷用人の金田半右衛門が内々に来邸、凞子より太政大臣宣下の祝儀として、黄金五枚・二荷三種・縮緬十巻を贈られる。（雑事日記）

●二月十二日、太政大臣宣下の祝儀として、将軍徳川家宣より白銀百枚・一荷二種、凞子より綿百把・一荷二種を贈られる。（雑事日記）同日、江戸より上洛していた高家の能登守織田信門が近衛邸に来邸。（『中御門天皇御即位次第』）

●二月二十五日、将軍徳川家宣より太政大臣宣下の祝儀として、内々に綿二百把及び一荷二種を贈られる。（雑事日記）

●二月二十七日、江戸滞在中の基凞へ送った詠草（将軍徳川家宣の五十賀に贈る和歌の添削）が届く。（基凞）同日、彦根藩主の掃部頭井伊直該より太政大臣宣下の祝儀として、太刀馬代黄金一枚・三種・樽代千疋を贈られる。（雑事日記）

●三月七日、将軍徳川家宣五十賀の祝儀を携え、勅使で武家伝奏の前権大納言庭田重条及び同高野保春たちが江戸下向。中御門院は家宣へ家凞筆『古今和歌集』賀部一巻を付した若松の打枝などを、家凞は紅白紗綾五巻及び肴一種を贈る。この祝儀は三月二十五日に江戸に到着。（『中御門天皇御即位次第』・実紀）

●五月六日、宝永六年五月に見た小塩山勝持寺所蔵の小野道風筆とされる額に、二重包物・箱などを贈る。箱書（蓋裏）も併せて揮毫。「小塩山勝持寺之榜、世伝道風朝臣之書、筆勢高妙間架遒逸其為真蹟不待弁而明矣、実七百年前之物也、風磨雨洗、■剥腐黒、今蔵在寺庫、余盛以銀嚢、蔵以桑箱、寄付于時且戒僧侶、謹厳韜縢、以伝于永遠、使知瑰偉絶特之美云、正徳元年五月六日、摂政太政大臣家凞」（秘鈔・綜考）

●五月十六日、東福寺大雄院住持の虎渓永義（東福寺二百四十六世）を通じて仙台藩主伊達家より所望されていた伊達家系図

を書写し、完成。（秘鈔）永義は長門生まれで俗姓毛利氏。寛文年間に仙台藩主伊達家に乞われ仙台の東昌寺（臨済宗東福寺派）に入っており、伊達家との関係が深い。

●六月二日、五月二十三日に江戸を発った品に併せて「御幼君主上御為と思候て、乍御労煩今暫御務被成可然由」云々の内容を持つ、摂政辞任を慰留する文書が幕府より到来。（雑事日記）

●六月十一日、黄檗僧の大随道機（伏見・仏国寺住持）及び百拙元養の願いにより、『大円広慧国師（高泉性澂）碑陰銘』を書写して贈る（書写した日付は五月二十六日付）。銘は仏国寺に現存。（雑事日記・遺墨）百拙元養は京生まれで俗姓原田氏。高泉性澂の弟子大随道機に随って黄檗僧となる。享保二十年に鳴滝の地に近衛家より旧殿を下賜され海雲山法蔵寺を建立、初世住持となった。（『黄檗文化人名辞典』）

●六月二十一日、金沢藩主前田家より太刀馬代判金一枚など、初めての献上物がある。（雑事日記・秘鈔）

●六月二十三日（『近衛家本邸・別邸ほか敷地坪数等一覧』では五月二十三日）、家熙の別業を建てる土地とするため、将軍徳川家宣の尽力（秘鈔「文照（ママ）院様厚御取斗」）により鴨川沿いの土手町にある聖護院宮所有地を入手。土地の所在地は、寛保・延享ごろの絵図に鴨川の西側、丸太町通より南、夷川通より北の地に「近衛やしき」とあるため、この一帯だったと考えるのが妥当か（『基熙公記』には「東河原、荒神口ノ下、二条ノ上也」とあるが、この一帯は含まれるため矛盾しない）。坪数は二千九百六十七坪（東側六十間、西側六十間五尺、南側四十九軒半、北側四十八間五尺）。土地受取の際の立会人として、近衛家より松井主殿・青侍の小谷伝之丞・堀口市郎兵衛、幕府より京都東町奉行所与力の石崎喜右衛門、同西町奉行所与力の熊倉市大夫、大工頭中井主水の手代らが出役。（雑事日記・秘鈔・センチュリー文化財団蔵『新版増補京絵図』〔慶應義塾大学附属研究所斯道文庫寄託〕・東京都立中央図書館特別文庫室蔵『近衛家本邸・別邸ほか敷地坪数等一覧』／函架番号木〇三二―二―一六）同日、家久の内大臣宣下における家熙への祝儀（将軍徳川家宣より綿百把及び二種一荷）、江戸を発つ。（実紀）

●七月四日、中元として熙子へ行成紙一箱を贈る。（雑事日記）

●七月十二日、丹波・篠山藩主で京都所司代の紀伊守松平信庸が来邸し、大書院で対面。従来の家領（宇治郡岡屋村、久世郡枇杷庄村ほか）に加え、摂津・河辺郡伊丹村のうち八百三十三石余、同万多羅寺村のうち百六十六石余（合計千石）加増の旨を伝えられる。これにより、近衛家家領は全てを合わせて二千七百九十七石余となる。（家譜・秘鈔・『伊丹市史』）

●七月十六日、昨年より所望していた『漢隷字源』四冊、『李嶠雑詠』・『新儀式』・『水黄記』・『左記』・『右記』・『本朝月令』・『名例律』・『賊盗律』・『諸道勘文』各一冊の新写が完成、家熙の代理で基熙が将軍徳川家宣より受け取る。（基熙）

●七月十八日、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴が来邸し、大書院で対面。三汁七菜などの料理を振る舞う。様々な献上物のほか、内々に「石手鑑」及び唐扇子を贈られる。（雑事日記）

●七月十九日、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴より琉球馬（栗毛）一匹を贈られる。使者は同藩近習の三原作左衛門。直ちに馬場へ出向き、作左衛門の乗馬を見る。その後作左衛門へ菓子・吸物・酒を振る舞い、白銀二枚を下賜。（雑事日記）

●七月二十七日、太政大臣を辞する。（家譜）

●八月七日、家領加増の祝儀として、安濃津藩主の和泉守藤堂高敏より太刀馬代黄金一枚・二種・樽代千疋を贈られる。（雑事日記）

●八月十二日、近衛家諸大夫の石見守中川長堅、近衛家領加増の礼のため江戸へ到着。（基熙）長堅は宇治郡大和田村にある柳大明神（現称は許波多神社）の神主主膳正木村治次の次男で、この年七月に諸大夫に取り立てられた。木村家は元和七年に近衛信尋の推挙によって右兵衛尉治安が神主となって以降、現在に及ぶ。（『地下家伝』・『許波多神社御由緒』）

●八月十五日、家領加増の礼として、将軍徳川家宣へ縮緬十巻・干鯛・金馬代、熙子へ祝儀（詳細不明）、また家宣へ内々に羽二重十疋及び二種一荷を贈る。（実紀）

●八月二十五日、宝永元年より行っていた常子内親王の祥月命日における『妙法蓮華経』八巻の書写が、八年をかけて完成（外題は霊元院宸筆）。大徳寺へ供養料白銀五枚とともに奉納（書写の日付は八月二十六日付）、また経の供養料として白銀十枚も奉納。奥書「孝子家熙嘗当　先妣無上法院三周諱、欲書写大乗妙典、荘厳報地意竣功、太速則必不可無遺失也、古人有一歳誦一巻、八年而終者、蓋簡散心也、今也効之分一巻作十二而毎値月忌書其一分、元禄甲申起至正徳辛卯乃八年而得終、全部目謹聞　太上天皇忝灑宸翰賜之、表題又捐大姉月忌辰請清衆伸供養永附于龍宝山大徳禅寺、伏願性天雲歛慧海浪澄道、証無上菩提疾於龍女献珠之疾、願同観音薩埵清似蟾輪印水之清、正徳元年八月廿六日、摂政前太政大臣藤原家熙謹記」。江戸滞在中の基熙もこの報を聞き、「殊勝志感悦之旨」とともに「法のはなひらくを見ればわが後もかくとはるべきことのうれしさ」詠を伝えた。（基熙・雑事日記・『近衛家熙公遺墨展覧会目録』）同日、所望していた『日本紀分類』二十六冊、『諸神名書』二巻の新写が完成、家熙の代理で基熙が将軍徳川家宣より受け取る。（基熙）

●九月十四日、林丘寺門跡へ出掛ける。左中将櫛笥隆実が同道。（雑事日記）

●十月十九日、女児誕生。母・幼名とも不明（徳君または濃君か）。早世（法号は要無童子か）。（基熙・『陽明家系譜』）

●十一月八日、堺奉行の壱岐守浅野長恒（元赤穂藩主の内匠頭浅野長矩の叔父）が来邸し、小書院で対面。太刀馬代を贈られる。（雑事日記）

●十一月二十一日、将軍徳川家宣よりの贈物（十一月一日に朝鮮国王粛宗より家宣へ献上されたものの中から、人参二斤・色紙十巻・墨二十挺・筆十五本）、江戸を発つ。（実紀）

●十一月二十六日、大随道機及び百拙元養が来邸。同日、新井白石の従五位下筑後守叙任（十月十一日）を祝い、金五百疋及び内々の祝儀を贈る。（雑事日記）

●十二月十七日、卯下刻、東山院法要のため般舟院に参詣、葩五十斤及び自筆の『妙法蓮華経』「普門品」一巻を奉納。（雑事日記）

●十二月十八日、家領加増の祝儀を行う。家熙を筆頭に、家久・姫君・基熙附女房の侍従・差次蔵人錦小路頼庸・医師の保生院法印浦野道英たちが参加。終日饗応があり、諸大夫・近習・青侍・坊主にも夜食が振る舞われた。また、「下部」に至るまで残らず金子・綿・青銅などが配られた。（雑事日記）

●十二月二十三日、近衛家諸大夫の筑後守進藤長房の七十賀に

際し、小袖一重・自筆の詩一軸・肴一種を贈る。（雑事日記）
★此年、新井白石の願いにより「天爵堂」（白石の号のひとつ。典拠は『孟子』）を揮毫。十二月十八日付の受取状あり。（宮崎道生氏『定本折りたく柴の記釈義』）

正徳二年（一七一二）壬辰　四十六歳　**従一位**

●一月二日、近衛邸東庭で行われた御手斧始及び御乗初を見る。御乗初奉行は近衛家諸大夫の刑部大輔進藤長之がつとめ、併せて新調の唐馬具なども飾られた。（雑事日記）
●一月十八日、江戸より飛脚が到来、将軍徳川家宣より年始の祝儀として内々に黄金三枚・肴二種（代四百疋）・樽代千疋を贈られる。「如恒例」とあるので、このような内容の祝儀が毎年贈られたらしい。（雑事日記）
●二月二十一日、『礼儀類典』一箱の新写が完成、家熙の代理で基熙が将軍徳川家宣より受け取る。（基熙）
●三月十四日、憲子内親王二十五回忌に際し、西王寺へ金三百疋を奉納。（雑事日記）
●二月から三月にかけて、病の床に臥す。（『滋野井公澄日記』）
●四月五日、『般若心経』を行草体で書写。（個人蔵）
●五月十二日、江戸滞在中の刑部大輔進藤長之を介して、新井白石へ紺平緒を贈る。（『新井白石日記』）
●六月十六日、異母弟の辰君（基熙末子。母は小牧。小牧が江戸で妊娠し、この春に京で出産）を養育することが内々に決定。辰君は神田明神の神託があって出生したという。（基熙）
●六月十七日、『般若心経』を書写。（『陽明墨宝』春名好重氏解説）
●七月二十八日、近江・膳所藩主の隠岐守本多康慶が初めて来邸し、大書院で対面。康慶は寛文十一年・延宝元年・宝永五年の京都及び内裏の火災に際し、速やかに上洛し消火活動に当たっていた。（雑事日記）
●八月一日、修理権大夫沢忠量（ただかず）が取り次ぎ、摂津・住吉社神主の大領外記と対面。太刀銀馬代を贈られる。（雑事日記）
●八月二日、法橋寺嶋良安撰『和漢三才図会』都合十九冊に目を通し、返却。（雑事日記）
●八月二十一日、常子内親王の供養料として白銀五枚を大徳寺へ奉納。（雑事日記）
●八月二十五日、中御門院より「勅書御画代筆」が命ぜられる。即刻揮毫し、献上。（雑事日記）
●八月二十八日、摂政及び兵杖などを辞する。東山・中御門両院のおよそ五年間摂関をつとめた。（家譜）基熙が関白を十三年間、家久が十年間つとめた年数に比して短いが、これは「御当職ノ間ハ、一日モ御暇ナシ。御学問等ノコトモ、思召ノヤウニハナラズ。唯明暮右ノ旧記ヲ見テ、変ニ応ズルノ心得ノ外他事ナシ。（中略）当職ノ人ハ、地下ノ官人ヨリ、輿丁マデノ事明カナラザレバ済マズ。大苦労ト謂ツベシ」とあるように、家熙は好きな学問に打ち込めず苦労が多かったからであろう。また、摂関在任中は「賜物ハ例ヨリ夥シ」かったが、「其納物ハ一銭モ他ニ漏サズ。年々歳々ニ書物ノ料」にあてており、購入の際にも「大方ノ大部ナル書ニテモ。サマデ御苦労ニナラズ」だった。（槐記）
●九月二日、午刻、吉田及び岡崎周辺の遊覧に出掛け、途中錦小路頼庸宅に立ち寄り、夜に帰宅。（家久・頼庸）

●九月八日、前年五月二十三日に入手した土地に隠居所として住まう御殿を建築するため、入札を行う。作事料は三千両。作事を請け負わせたのは菊屋八兵衛・近江屋六右衛門・山形屋一郎兵衛。また、京都代官の小堀仁右衛門は北側のしきり壁の普請を、角倉与一玄懐（素庵の玄孫）は石垣の普請をそれぞれ請け負う。（雑事日記）ここに建築された御殿は、のちに河原御殿と称されるようになる（当初「三本木御殿」と称されたふしもある）。河原御殿は明治維新の際に長州藩士の木戸孝允に譲られ、現在、中京区土手下夷川上ルの職員会館かもがわ内に遺構の一部が現存するが、この時の建築物であるかどうかはさらなる調査を要する。（名和修先生御教示・『京都府近代和風建築総合調査報告書』）

●九月十日、辰刻、河原御殿の木造始。行ったのは近衛家出入りの大工棟梁甚三郎及び吉兵衛。（雑事日記）この甚三郎なる人物は、代々禁裏などの作事御用をつとめた木子甚三郎のことであろう。木子家伝来の文書は東京都立中央図書館に蔵され、河原御殿の指図も現存。ただし、この時の指図かどうかはなお検討を要する。（東京都立中央図書館特別文庫室蔵『近衛家河原邸指図』／函架番号木〇三二―三）

●九月二十一日、絵師の法橋坂本養伯が来邸。大書院で山水の屏風絵の揮毫を命じ、その様子を見る。（家久・雑事日記）

●十月二日、大坂住の竹田近江少掾が受領の御礼言上のため参上、からくりを持参し演じるのを見る。近江少掾へ一汁五菜の料理を設け、綿三屯を贈る。（雑事日記）

●十月六日、二階町預かり屋敷地の替え地として、河原町通二条上ルの土地（河原町通西側、百九十七坪八分）が近衛家に引き渡される（宝永の大火による公家町拡張の代替措置か）。引き渡しの際の立会人として、近衛家より修理方の松井主殿、幕府より京都所司代与力の冨田藤蔵、京都東町奉行所与力の芦谷幸大夫・同土屋皆右衛門・同乾茂右衛門、同西町奉行所与力の熊倉市大夫・同森田仲右衛門・同佐久間沢右衛門・同七加家惣介、大工頭中井家棟梁の堀内元右衛門・同安田直右衛門が出役。なお、近衛家は河原町通二条角（河原町通東側、法雲寺脇）にも預かり地として百二十六坪八分の土地を所有。（雑事日記）同日、伊勢・専修寺（真宗高田派本山）門主の円猷を家熙の猶子とすることに決定。円猷は伏見宮貞致（さだゆき）親王の五男で、幼名は勝宮。元禄七年に専修寺門主の堯円（花山院定好男）の養子となっているが、専修寺僧の慈智院が家熙の猶子になることを願い出ていた。（雑事日記・秘鈔・『系図纂要』）

●十月七日、娘の常君、入内が決定。（雑事日記）

●十月十三日、将軍徳川家宣薨去。（基熙）熙子の院号を「天英院」と称する旨の書状が二十六日に届けられる。（雑事日記）

●十月十八日、伊勢・専修寺門主の円猷より、猶子の礼として太刀馬代銀一枚・一荷二種・綿二十把を贈られる。（雑事日記）

●十月二十三日、徳川家宣の院号「大光院」・「惇信院」・「龍光院」を書写（実際に付けられた院号は「文昭院」）。（基熙）

●十月二十七日、徳川家宣の葬儀に際し、贈経使として石見守中川長堅を江戸へ派遣。自筆の『般若心経』一巻（紺紙金泥、裏砂子、天地泥絵）を贈る。（雑事日記）

●十一月九日、「書写山性空上人古賛」（『性空上人伝』）を書写。画は伯母の林丘寺宮元瑤内親王（後水尾院皇女）が揮毫したという。（陽明文庫蔵／函架番号八九五八七）

●十一月二十一日、天英院へ「御見舞」として八幡牛蒡及び東寺水菜を一箱ずつ贈る。（雑事日記）
●十二月二日、徳川家宣の位牌を安置する知恩院へ『妙法蓮華経』一部を奉納。（雑事日記）
●十二月十日、徳川家宣の形見として狩野祐勢正信筆黄石公（秦代の隠士）の掛物及び青磁胡蝶の花生が贈られる。これらの品は十二月四日に江戸を発った。（雑事日記・実紀）
●十二月十七日、『金剛般若経』を楷書体で書写。（陽明文庫蔵・新『書道全集』22）
●十二月十八日、方違えのため刑部大輔進藤長之宅に出掛ける。（頼庸）
●十二月二十三日、家久、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴の娘満姫と結婚。（基熙）

正徳三年（一七一三）癸巳　四十七歳　**従一位**

●一月八日、本満寺僧の日遍が来邸し、大書院で対面。「依御嘉例」とあるので、遅くともこの時期までには恒例の対面となっていたらしい。（雑事日記）
●一月二十四日、徳川家宣の百ヶ日法要に際し、西王寺へ供養料三百疋を奉納。右衛門督石井行康が代参。西王寺は近衛家歴代の位牌のほかに、家宣の位牌なども安置している。（西王寺閑栖の滝全隆猊下御教示・雑事日記）
●一月二十八日、この年初めての参内。（雑事日記）
●二月四日、武家伝奏より、徳川家継の将軍宣下のため江戸へ下向するよう要請される。（雑事日記）
●二月十六日、家熙の江戸滞在中における馳走人が、豊後・岡藩主の内膳正中川久忠に決まる。（実紀）
●二月二十一日、家熙の江戸下向に際し、天英院より迎えの使者として天英院用人の豊前守本間季孝が派遣。（実紀）
●二月二十三日、徳川家継の正二位権大納言叙任（前年十二月二十三日）における家熙への祝儀（家継より綿百把及び二種二荷）・常君入内の祝儀における家熙への祝儀（家継より羽二重及び一種）、それぞれ江戸を発つ。（実紀）
●三月三日、改めて兵杖を勅賜。（家譜）
●三月四日、家熙附女房のおつま、家熙の江戸下向に供奉する諸大夫・近習・青侍・坊主へ料理を振る舞う。（雑事日記）
●三月九日、卯半刻、江戸へ向け出発。道中は東海道、乗物は輿を用いる。ほかに勅使で武家伝奏の権大納言徳大寺公全（きんたけ）及び同庭田重条、院使の前権中納言梅小路共方、新女院使の参議万里小路尚房に加え、左大将九条師孝・前権中納言高倉永福・三位土御門泰福・少納言高辻総長（ふさなが）たちも江戸へ下向。この日は近江・草津宿泊。この時の旅行記である自筆の『関東下向記』一冊が陽明文庫に現存。なお、九条師孝の祝儀と表向きは同じとなるよう、新将軍家継へ太刀馬代黄金一枚・晒布三十疋・薫衣香三十袋入一箱を、天英院へ縮緬十巻・薫衣香一箱・肴一種を用意。（雑事日記・家譜・『関東下向記』・実紀）
●三月十日、卯刻、近江・草津宿発。梅ノ木の和中散薬店の傍らで休む。巳刻、同国石部宿で昼休み。夏見及び田川で休む。未半刻、同国水口宿着。（『関東下向記』・『東海道名所図会』）
●三月十一日、卯刻、近江・水口宿発。巳半刻、伊勢・坂之下宿で昼休み。関宿の観音堂前で休み。未半刻、同国亀山宿着。（『関東下向記』・『東海道名所図会』）

●三月十二日、日の出過ぎ、伊勢・亀山宿発。森ノ下及び石薬師宿で休む。午刻、同国四日市宿で昼休み。富田で休み、焼き蛤を見る。申刻、同国桑名宿着。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十三日、日の出過ぎ、伊勢・桑名宿発。強風のため七里の渡し(海路)を用いず、木曽川から乗船して佐屋廻(佐屋街道)の行路を用いる。船中へ尾張藩主徳川家より贈物あり。四ツ半、尾張・佐屋宿(桑名宿より川舟で三里)で昼休み。陸行して冠(神守か)で休む。万場の渡しで輿のまま乗船。岩塚で休む。申半刻、同国宮宿着。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十四日、未明、尾張・宮宿発。阿野(有松と三河・池鯉鮒宿の間)で休む。四ツ過ぎ、三河・岡崎領の大浜及び岡崎宿で昼休み、岡崎藩主の水野大監物忠之より馳走あり。七ツ、二村山法蔵寺の門前で休む。日暮れ頃、同国御油宿着。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十五日、七ツ前、三河・御油宿発。遠江・茅ン場まで十三里半の本坂越の行路を用いる。一里半ほど行った輙方村口で休む。そこから乗船し、嵩山で馳走人と対面。嵩山から二里半の山道の途中で休み、荒井及び今切の海を見る。四ツ半前、遠江・三ヶ日で昼休み。「大キ」及び気賀で休み、ここでこの旅において初めて歩いて行く。気賀の渡しで乗船、浜名湖を渡り、浜松宿手前の松原で休む。日暮れ頃、同国浜松宿着。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十六日、丑半刻、遠江・浜松宿発。天竜川を未明に渡る。「ナカ森」及び見付台(日坂)宿で休む。巳刻過ぎ、同国袋井宿で昼休み。原川村でオランダ人四人と邂逅。「悉下馬、四人列立、乗輿ノ簾ヲアケテ見ル時ニ、四人共ニ手ヲ合、何ヤラン云テ為礼」(『関東下向記』)。掛川の庚申堂・光善寺観音堂・秀吉茶屋で休む。秀吉茶屋では豊臣秀吉所持と伝える茶釜を見る。申半刻、大井川を越える。川筋は二本あり、先に渡った水深は「帯下通」、次の水深は「帯通」だった。川を越えて休む。この時、刑部大輔進藤長之が迎えのため江戸より参着。日暮れ頃、駿河・島田宿着。天英院の使者金田半右衛門が参上、蕎麦粉・菓子・子籠などを贈られる。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十七日、未明、駿河・島田宿発。志太郡瀬戸・藤枝宿・岡部宿の茶屋で休む。宇津山を越え、同国鞠子宿で昼休み。宿舎で「悦山大字三幅対龍虎掛物」や佐々木玄龍の大字の屏風を見、掛物を古法眼狩野元信の偽物と鑑定。さらに駿府浅間社神主の神宮左近が所蔵する近衛信尹・日野中納言などの詠歌のほか、宿の主横田三左衛門が所蔵する後水尾院宸翰を見る。七ツ半、同国江尻宿着。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十八日、未明、駿河・江尻宿発。有度郡の巨鼇山清見寺・田子ノ浦(薩埵峠を越えた辺り)の茶屋・蒲原宿のはずれで休む。富士川は船で渡る。水深は浅く「舟中底ヘアタリテコト〳〵云テナル」状態だった。「カシマ」及び七面社で休む。九ツ過ぎ、吉原宿で昼休み。五ツ、伊豆・三島宿着。弘前藩主津軽家より菊及び肴を贈られる。(『関東下向記』・『東海道名所図会』)

●三月十九日、七ツ過ぎ、伊豆・三島宿発。富士見平東方にある山中村の茶屋・箱根宿・畑及び湯元の茶屋・入生田の長興山浄泰寺門前で休む。八ツ半、相模・小田原宿着。小田原藩主の

加賀守大久保忠増より樽・肴を、蓮浄院（徳川家宣の側室お須免の方。前権中納言園池宗朝女）より奉書・肴を、若年寄の伊賀守鳥居忠英より肴・菊・煙管・煙草を、鹿児島藩主島津家より菊をそれぞれ贈られる。（『関東下向記』・『東海道名所図会』）

●三月二十日、早朝、相模・小田原宿発。酒匂の渡を越えた松原及び梅沢村の茶屋で休む。大磯の浜では輿から降りて歩く。四ツ半、大磯宿で昼休み。馬入川を舟で渡り、「ナンコ茶屋」で休む。（『関東下向記』・『東海道名所図会』）これをもって『関東下向記』の記述が終了。

●三月二十三日、巳上刻、江戸着。宿舎は府内の神田御殿。老中の豊後守阿部正喬及び高家の右衛門督大沢基隆より慰労される。宿舎には新井白石も参上。この日は雲鶴紋の袍、黄色の単、ひきへぎを着用し、藤原忠通及び近衛基通の例に倣い新調した紅の桧扇（有徳の老人が持つものとされる）を持った。（基熙・実紀・『新井白石日記』・新井白石『新近問答』）同日、京都の近衛邸に弘前藩主の土佐守津軽信寿より江戸下向の餞別として、銀三百枚及び干鯛一箱を贈られる。（雑事日記）

●三月二十五日、暮れ過ぎ、宿舎に新井白石が参上。白石へ「蔡邕八分碑」一帖、「平氏三大臣像」三幅、「弘法伝教両大師書」二帖、「橘逸勢書」（『伊都内親王願文』であろう）一帖と「事実」一冊、「鞆弓懸図」一巻、「伊勢家書」一冊、「三条家装束抄」一冊を贈り、また、「源忠久鎧図」一巻を貸す。貸し出していた「賀茂祭図」はこの日返却される。（『新井白石日記』）

●三月二十七日、新井白石より「外国之人物之図」、「象ノ図」二枚、「宴酔之図」一巻、「羽形之図」一巻、「三十六歌仙絵巻」一巻、「蝦夷国之図」一巻を借りる。また、帙の煙草入れをひとつ贈られる。（『新井白石日記』）

●三月二十九日、宿舎に新井白石が参上。二十七日に借りた「三十六歌仙絵巻」を返却。絵師の住吉内蔵広保が所蔵する「年中行事絵巻」十五巻を借りる。この「年中行事絵巻」を用いて、内裏の制度などを白石に解説。また、白石より「世界図」及び「ヲランダ人の像」を贈られる。（『新井白石日記』・新井白石『新近問答』）

●三月三十日、新井白石より『集古印譜』の内の四冊を借りる。（『新井白石日記』）

●四月二日、徳川家継将軍宣下。巳刻過ぎ、江戸城大広間上段で家継と対面（勅使・院使・新女院使は中段で対面）。家継へ年賀として銀馬代を、将軍宣下の祝儀として金馬代及び晒布を、元服の祝儀として銀馬代及び二種一荷を贈る。また天英院へ年賀として縮緬及び肴を、将軍宣下の祝儀として縮緬・薫衣香・肴を、元服の祝儀として二種一荷を贈る。家継生母の月光院（お喜世の方。勝田玄哲女）へ将軍宣下の祝儀として縮緬・干鯛・薫衣香を、元服の祝儀として一種一荷を贈る。八ツ、新井白石より参賀を受ける。（実紀・『新井白石日記』）

●四月三日、宿舎に高家の左京大夫吉良義俊が参上、鶴一双及び酒一樽を贈られる。同日、大奥に出掛け縮緬二十巻・三種二荷・「御嬉戯の具」・袷衣・鮮魚を贈る。（実紀）

●四月四日、大奥に出掛ける。（実紀）

●四月五日、饗宴に招かれ、猿楽を見る。また、将軍徳川家継へ薫衣香を贈る。（実紀）

●四月六日、大奥に出掛ける。（実紀）

●四月七日、宿舎に老中の河内守井上正岑及び高家の右衛門督

大沢基隆が参上、銀五百枚及び綿五百把を贈られる。また天英院より留守居番の平田伊右衛門を介して時服二十を、月光院より留守居番の戸田喜右衛門を介して時服十を贈られる。（実紀）

●四月九日、御浜御殿で饗応される。（勅使などは招かれず、九条師孝は別の日に饗応）。迎えの使者は老中の相模守土屋政直及び若年寄の大和守久世重之。高家の導きで林園を遊覧し、池の中島の茶亭（ここに掛かる額「狎鴎亭」は家熙の揮毫とされる）で茶菓を食す。若年寄の伊賀守鳥居忠英を介して将軍徳川家継・天英院・月光院より檜重が贈られる。三汁十菜の饗膳が済んだ後、さらに庭を散策し、清水の亭で飲食。夕方に帰館。この日、御浜御殿には奏者番・書院番頭・桐間番頭・大目付・中奥小姓・先手持筒頭・目付・使番・小十人頭が伺候。（実紀）

●四月十一日、大奥に出掛ける。家熙と左大将九条師孝以外の公卿たちはこの日に帰洛。（実紀）

●四月十二日、京都の近衛邸に鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴より江戸下向の餞別として、七島鰹節二百五十本入一箱・蝋燭二百挺・白銀百枚を贈られる。（雑事日記）

●四月十三日、大奥に出掛ける。吹上の庭を天英院及び月光院とともに遊覧し、繻子十巻・色滑綸子三十端・塩鴨一箱を贈られる。（実紀）

●四月十五日、七ツ、新井白石が参上。（『新井白石日記』）

●四月十六日、大奥に出掛ける。左大将九条師孝が帰洛。（実紀）

●四月十八日、大奥に出掛け、糖菓一壺及び子籠の鮭一箱を贈られる。（実紀）

●四月十九日、新井白石より「大明分野図」を贈られる。（『新井白石日記』）

●四月二十一日、新井白石より鎌倉・建長寺の額の写し六幅を借りる。（『新井白石日記』）

●四月二十三日、天英院より将軍宣下の祝儀として紗綾三十巻及び二種一荷を、月光院より元服の祝儀として縮緬十巻及び一種一荷、将軍宣下の祝儀として羽二重二十疋及び二種一荷をそれぞれ贈られる。同日、大奥に出掛ける。（実紀）

●四月二十四日、根津権現に参詣。高家や目付が伺候し、先手頭や徒頭の各一隊が警衛にあたった。（実紀）根津権現の境内はかつて甲府藩主徳川綱重の屋敷地だったが、その子綱豊（家宣）が自身の産土神として信仰し屋敷地を寄進した関係で、家宣との関わりが非常に深い。宝永年間に新社殿が造営されたばかりであった。（『江戸名所図会』）

●四月二十五日、老中の豊後守阿部正喬及び高家の右衛門督大沢基隆が参上、餞別として将軍徳川家継より金百枚・紅白大綸子五十端・料紙硯の箱を、天英院より緞子二十巻・八丈紬二十端・文台・見台・硯箱・銀香炉を、月光院より繻珍十巻・大紋縮緬二十巻・重硯箱を、法心院（徳川家宣の側室お古牟の方。村上伊左衛門女）より大紋紗綾二十端・香棚を、蓮浄院より大紋羽二重二十端・銀釣花瓶を贈られる。同日、大奥へ出掛ける。（実紀）

●四月二十八日、大奥に出掛け、将軍徳川家継と対面。帰洛が近づいてきたため、餞別として家継より伽羅一木・印籠・巾着二十・屏風一双・画帖一帖・塩鴨一箱を、天英院より繻珍十巻・羽二重五十疋・綿百把を、月光院より紋紗二十巻をそれぞれ贈られる。（実紀）同日、仙台藩主の左中将伊達吉村より、元

作事奉行若狭守神尾元珍旧蔵の瀬戸広沢手茶入（銘「花薄」）を贈られる。箱書「花薄広沢手／神尾若州入道紹元所持／正徳三年四月廿八日於／江府仙台中将恵贈」（『近衛公爵御蔵器第二回入札目録』）

●四月二十九日、帰洛の挨拶のため登城。家熙の見送りに天英院用人の山城守堀正勝の派遣が決定。（実紀）

●五月一日、帰洛の途につく。（基熙・実紀）家熙は江戸滞在中、江戸の筆工で唐の筆の製法を伝えている者の存在を知り、その製法を見るべく仕丁数人に探させたが見つからなかった。このことを聞いた唐様書家の細井広沢は、唐筆の製法などを記し、家熙の近臣中原図書に献上しようとしている。この時にまとめられたものが広沢の『思貽斎管城二譜』である。

●五月三日、広島藩主浅野家家中の山西勝佐が京都の近衛邸に参上。勝佐は寺田無禅の孫で、家熙とは「竹馬友」であったが、不在のために会えなかった。（基熙）

●五月十五日、卯下刻半、江戸より帰宅。（家譜・雑事日記）

●五月二十三日、河原御殿が完成し、移住。御殿には「物外楼」という高亭が備わり、「此公ノ始終御物数寄ニテ出来タリシ」（槐記）作りであった。閏五月十二日に基熙は初めて御殿を訪ね、「高亭景色無尽、東北山色、賀茂河流可謂勝地、遠望近観未曽有之地也」（基熙）と感想を述べ、「住君が袖の中にも入りにけりつらなる山も遠き流れも」（同）と詠んだ（基熙自筆和歌懐紙が陽明文庫に現存）。ちなみに、家熙は五歳の時からこれまで二十七ヶ所も住居を移したという。（基熙・秘鈔・槐記・東京国立博物館『宮廷のみやび―近衛家一〇〇〇年の名宝』展図録）

●五月三十日、異母妹の八十君、「前代（徳川家宣）の御遺命」によって幕府より所領三百石を贈られる。（実紀）

●六月二十八日、将軍徳川家継へ、八十君へ所領を贈られた礼として肴及び樽代を、暑中見舞として寒焼餅及び粕漬を贈る。また、帰洛の礼としておつまより家継へ肴代を贈る。（実紀）

●七月三日、中御門院より色紙及び巻物が届けられる。書写も併せて命ぜられたか。（雑事日記）

●七月十一日、中御門院より『三十六歌仙』の外題の書写を命ぜられる。（雑事日記）

●七月二十八日、天英院より「お手伝い」として内々に金三百両を贈られる。（雑事日記・蕪稿「江戸時代の公家は本当に貧乏だったのか？―近衛家熙を支えた経済力―」）

●八月二十七日、京都所司代の紀伊守松平信庸が江戸下向の暇乞いのため来邸、これに伴い茶の湯を催す。客は信庸のほか、禁裏（中御門院）附武士の伊勢守久留正清。家熙の茶事を記録した陽明文庫蔵『御茶湯之記』の記述はこの日から開始。（御茶湯）

●九月十一日、茶の湯を催す。客は基熙。（御茶湯）

●九月十三日、茶の湯を催す。客は家久・右大将徳大寺公全・姫君（公全室）。（御茶湯）

●九月十五日、茶の湯を催す。客は虎渓永義。（御茶湯）正徳元年五月、仙台藩主伊達家は永義を通じて家熙に伊達家系図の清書を願い出ており、永義は両家の仲介役の一端を担っていたらしいことが窺える。

●九月二十日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田家四世の不及斎久田宗也。（御茶湯・『日本の茶家』）

●九月二十八日、茶の湯を催す。客は円覚院及び遣光院。（御茶湯）
●九月二十九日、茶の湯を催す。客は小児科医の春台院村上宗伯・医師の久米玄察・小児科医の人見啓安。（御茶湯）村上宗伯は禁裏御典医とつとめ、家久室の満姫が正徳五年十一月に疱瘡に罹患した際にも治療にあたった。
●十月十日、徳川家宣の法要に際し、将軍徳川家継に菓子一箱を贈る。（実紀）
●十月十六日、茶の湯を催す。客は三位町尻兼量（かねかず）及び医師の法眼松木道宅。（御茶湯）
●十月二十四日、茶の湯を催す。客は右大将徳大寺公全・権大納言庭田重条・同櫛笥隆賀（たかよし）。（御茶湯）
●十月二十九日、茶の湯を催す。客は興福寺院家の成身院及び百拙元養。（御茶湯）
●十一月一日、茶の湯を催す。客は中井浄覚（正知）及び鴻池道億。（御茶湯）鴻池道億は大坂生まれ。鴻池の分家の出で、通称は善三郎・弥三兵衛。曾祖父は鴻池新右衛門（山中新六）、父は善兵衛秀重。茶人として著名で、千家との交友も深い。道具の目利きにも長じ、その鑑定は「道億ぎめ」と呼ばれ、鴻池本家四世の善右衛門宗貞らと親しく交わり、多くの名器を蒐集した。（『角川茶道大事典』・宮本又次氏『鴻池善右衛門』）
●十一月五日、茶の湯を催す。客は権大納言坊城俊清（としきよ）及び参議小倉熙季。（御茶湯）
●十一月九日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重及び中井主水正豊。（御茶湯・『豫楽院公茶杓箪笥』名和修氏解説）中井正豊は中井浄覚の弟正徳の子で伯父浄覚の養子となり、宝永七年十二月から享保二十年一月まで大工頭をつとめた。（平井聖氏『中井家文書の研究』）
●十一月十九日、茶の湯を催す。客は深諦院海慧及び人見啓安。（御茶湯）深諦院は東本願寺十六世法主一如光海の子で、同寺十八世法主従如光超の実父。
●十一月二十五日、茶の湯を催す。客は久米元察・久田宗也・刑部大輔進藤長之。（御茶湯）
●十二月三日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び加鍋作安。（御茶湯）加鍋作安は作庵とも。小児科医で、小川通夷川上ルに住まいしていたことが『京都御役所向大概覚書』に見える。
●十二月九日、茶の湯を催す。客は参議風早公長及び左中将桜井氏敦（うじあつ）。（御茶湯）
●十二月十一日、茶の湯を催す。客は禁裏（中御門院）附武士の伊勢守久留正清・仙洞（霊元院）附武士の志摩守荒木政羽・検非違使の越中守町口元孝。（御茶湯）
●冬、『五節淵酔絵』を揮毫。（『近衛家熙公遺墨展覧会目録』）
★此年、新井白石との間で交わされた有職故実・入木道・絵巻などについての問答をまとめた『新近問答』が成る。

正徳四年（一七一四）甲午　四十八歳　　従一位

●一月五日、白馬節会に参列する家久及び権中納言滋野井公澄に、「練歩」の稽古をつける。（『滋野井公澄日記』）
●一月十九日、中御門院より色紙二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●一月二十日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。（御茶湯）

●二月七日、茶の湯を催す。客は差次蔵人錦小路頼庸及び加鍋作安。（御茶湯）
●二月十二日、三時知恩寺に入寺した娘の乙君が落飾し、同寺十二世門跡となる。法号、隆泉院霊誉尊融良光大禅定法尼（＝尊融尼）。（家久・秘鈔）
●三月二日、御風炉始。客は京都所司代の紀伊守松平信庸・京都東町奉行の安房守山口直重・禁裏（中御門院）附武士の丹後守小宮山昌方。（御茶湯）
●三月四日、茶の湯を催す。客は「本願寺殿」（東本願寺十七世法主の真如光性か）及び深諦院。（御茶湯）
●三月十日、茶の湯を催す。客は久田宗也・刑部大輔進藤長之・石見守中川長堅。（御茶湯）
●三月十三日、茶の湯を催す。客は鴻池道億及び中井浄覚。（御茶湯）
●三月十五日、茶の湯を催す。客は百拙元養及び久田宗也。（御茶湯）
●三月二十五日、茶の湯を催す。客は加鍋作安及び久米元察。（御茶湯）
●三月二十六日、『金剛般若経』を隷書体で書写。（遺墨）同日、『般若心経』を書写。（『近衛家熙公遺墨展覧会目録』）
●三月二十七日、茶の湯を催す。客は中井浄覚及び石井宗顔。（御茶湯）
●四月十九日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び近衛家諸大夫の治部大輔今大路孝在。（御茶湯）
●五月三日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び久米元察。（御茶湯）
●五月九日、茶の湯を催す。客は春瑞及び石井宗顔。（御茶湯）
●七月三日、中御門院より色紙四枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●七月九日、八十君と中御門院皇弟（東山院皇子）の秀宮（のちの閑院宮直仁親王）との婚姻が決定。（基熙）
●八月五日、常子内親王十三回忌に際し、天英院より用人の佐渡守早川重好が派遣。重好は天英院よりの贈物（氷糖一壺）を携行。（実紀）
●八月二十日、常子内親王の供養料として大徳寺へ銀三十枚を奉納。（雑事日記）
●八月二十一日、霊元院より色紙一枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●八月二十三日、霊元院より江戸へ贈る経文の書写を命ぜられるも、断る。（雑事日記）
●十月二十九日、口切りの茶の湯を催す。客は石井宗顔及び久田宗也。（御茶湯）
●十一月一日、茶の湯を催す。客は「本願寺殿」（東本願寺十七世法主の真如光性か）及び深諦院。（御茶湯）
●十一月四日、茶の湯を催す。客は中井浄覚及び鴻池道億。（御茶湯）
●十一月十二日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び久米元察。（御茶湯）
●十一月十四日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び春瑞。（御茶湯）
●十一月十七日、茶の湯を催す。客は百拙元養及び久田宗也。（御茶湯）

●十一月二十六日、『般若心経』を草書体で書写。（新見正路編纂『槐藻聚珍帖』）
●十一月三十日、茶の湯を催す。客は差次蔵人錦小路頼庸及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）
●十二月四日、天英院より、家熙が河原御殿で不自由することがないよう金三百両を贈られる。以後毎年三百両を贈る旨も伝えられる。（基熙）
●十二月八日、朝、茶の湯を催す。客は成身院及び石見守中川長堅。（御茶湯）
●十二月十日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之・石見守中川長堅・久田宗也。（御茶湯）
●十二月十三日、茶の湯を催す。客は深諦院及び刑部大輔進藤長之。（御茶湯）
●十二月十六日、茶の湯を催す。客は円覚院及び吉田右近。（御茶湯）

正徳五年（一七一五）乙未　四十九歳　従一位

●一月八日、御茶湯始。客は久米元察・刑部大輔進藤長之・石見守中川長堅。（御茶湯）
●一月十四日、茶の湯を催す。客は久田宗也及び近衛家諸大夫の修理亮進藤長富（刑部大輔進藤長之の子）。（御茶湯）
●一月二十四日、茶の湯を催す。吉田右近及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）
●一月二十九日、茶の湯を催す。客は願王院僧正及び石見守中川長堅。（御茶湯）
●二月一日、茶の湯を催す。客は権大納言坊城俊清及び参議風早公長。（御茶湯）
●二月七日、茶の湯を催す。客は中井浄覚・石井宗顔・鴻池道億。（御茶湯）
●二月十二日、中御門院より四月の東照宮百回忌法要に用いる願文を三通、また霊元院より『日光山縁起』一枚、それぞれの書写を命ぜられる。（家久）
●二月十六日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重及び刑部大輔進藤長之。（御茶湯）
●二月十八日、茶の湯を催す。客は京都代官の小堀仁右衛門克敬及び石川宗顔。（御茶湯）小堀克敬は小堀遠州の弟正春の孫で六百石の旗本。第四代京都代官として畿内四ヶ国のうち六万七百石余を支配。正徳元年九月の河原御殿作事にも仁右衛門が関与している。当時二条城の西、千本通角に住まいした。
●二月二十日、茶の湯を催す。客は禁裏（中御門院）附武士の伊勢守久留正清・仙洞（霊元院）附武士の志摩守荒木政羽・検非違使の越中守町口元孝。（御茶湯）
●三月三日、茶の湯を催す。客は虎渓永義及び石見守中川長堅。（御茶湯）
●三月四日、茶の湯を催す。客は差次蔵人錦小路頼庸・仙台藩主伊達家茶頭の山本宗林・刑部大輔進藤長之。（御茶湯）
●三月二十一日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）
●五月十八日、霊元院より巻物一軸の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●六月十一日、中御門院より聖廟御法楽和歌題が下されるも、断る。（雑事日記）

●六月二十五日、中御門院より「御絵賛」二枚及び「花短冊」二枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●六月、大師流能書の藤木甲斐司直に大師流の伝授を行う。（藤木司直『入木道注進』・『賀茂社家系図』・藤木司直墓碑銘）
●夏、『秀才対策』を書写。奥書「正徳乙未夏西岸虚舟子／執筆於物外楼下」（新見正路編纂『槐藻聚珍帖』）
●七月二日、娘の安己君と尾張藩主の参議徳川継友との婚姻が決定。（基熙）
●八月十二日、中御門院より色紙五枚の書写を命ぜられる。（雑事日記）
●八月二十六日、『金剛般若波羅蜜経』（色紙、金界）を書写。（『解題佳品目録』）
●八月三十日、常君の入内に際し、諱を「尚子（ひさこ）」とすることが基熙より示される。（基熙）
●九月七日、河原御殿でおつまが流産。（家久）
●九月十日、朝、おつま没。法号、景雲院貞厳性孝大姉。西王寺に葬られる。二十日にこの報が江戸に達し、常君の入内が翌年まで延期されることが決定。おつまにはのちに従三位が追贈された。（家久・雑事日記・実紀）
●九月二十七日、八十君、霊元院皇女の八十宮の名を避けるため、「八百君」に改名。（基熙）
●十一月十一日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）
●十一月十三日、茶の湯を催す。客は大随道機及び百拙元養。（御茶湯）
●十一月十五日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重及び同西町奉行の肥後守諏訪頼篤。（御茶湯）
●十一月二十日、茶の湯を催す。客は差次蔵人錦小路頼庸・治部大輔今大路孝在・修理亮進藤長富。（御茶湯）
●十一月二十一日、茶の湯を催す。客は京都代官の小堀仁右衛門克敬及び大工頭の中井主水正豊。（御茶湯）
●十一月二十四日、茶の湯を催す。客は権大納言坊城俊清及び風早中納言（公長か。ただしこの時参議）。（御茶湯）
●十一月二十七日、茶の湯を催す。客は石川宗顔及び鴻池道億。（御茶湯）
●十一月三十日、戌下刻、家久継室の満姫、疱瘡のため没。法号、光相院宝岳恵勝。（基熙・雑事日記）
★正徳年間、京の筆工の五世藤野雲平に「攀桂堂」の屋号を与える。攀桂堂は現在も同名の屋号で滋賀県高島市安曇川町に店を構えている。（攀桂堂筆師の藤野純一氏御教示）

享保元年（一七一六）丙申　五十歳　　従一位

●一月十六日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）
●一月二十日、茶の湯を催す。客は「修理殿」（修理亮進藤長富か。ただし家司に殿を付すのは不自然）及び石見守中川長堅。（御茶湯）
●一月二十二日、茶の湯を催す。客は成身院・大随道機・百拙元養。（御茶湯）
●二月四日、茶の湯を催す。客は加鍋作安及び久米元察。（御茶湯）
●閏二月一日、茶の湯を催す。客は裏千家六世の六閑斎千宗安

・久米元察・久田宗也。（御茶湯）
●閏二月七日、茶の湯を催す。客は左近及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）左近なる人物は未詳だが、家熙の乳母が左近と呼ばれており、あるいは同一人物の可能性もある。
●三月二十九日、御風炉始。客は大随道機及び百拙元養。（御茶湯）
●四月十一日、弘前藩主津軽家より永代御助力料として米五百石（代金百五十両）を贈られることが約束される。（秘鈔）
●四月二十七日、茶の湯を催す。客は成身院・大随道機・百拙元養。（御茶湯）
●五月二日、中御門院が諸事に慈悲深く、また仏教に深く帰依していることに感じた基熙が、院に『仁王経』の転読を勧め、また自らも一部書写して献上する旨を伝える。（基熙）
●五月九日、四月三十日に薨去した将軍徳川家継の葬儀に用いる中御門院宸筆『般若心経』を代筆するよう打診され、了承。翌十日に御所より料紙が届き、即日書写して献上。自身も『般若心経』を書写して贈る。（雑事日記）
●六月三日、家久に改元勘者の宣下があり、家熙が万事を指南。（雑事日記）
●七月一日、五月に基熙が申し入れていた『仁王経』書写に関し、高齢の基熙に代わって書写し、完成。（基熙・個人蔵）
●七月十二日、将軍徳川吉宗の江戸城本丸移徙（五月二十二日）の祝儀として、中御門院より吉宗へ三代集一箱などを贈る。三代集の筆者は、『古今和歌集』が准大臣松木宗顕、『後撰和歌集』が権中納言中山兼親、『拾遺和歌集』が権大納言日野輝光。これらの外題を家熙が書写。（『中御門天皇御即位次第』・実紀）
●八月九日、上賀茂社社家の岡本八之丞、近衛家より奉公人を仰せつけられ、要人と改名。要人はのちに大師流の能書として認められ、甲斐守に任ぜられた岡本邦氏。家熙に近侍し、その書風を学んだひとり。のちに『大唐六典』の筆者や後桜町院即位式に用いる万歳旗の清書御用などをつとめた。（雑事日記・岡本邦氏墓碑銘・蕪稿「書道大師流における「甲斐守」」）
●八月十三日、江戸城本丸移徙の祝儀を新将軍徳川吉宗へ贈る。また、大奥へ三種二荷を贈る。（実紀）
●八月二十三日、天英院を介し、将軍徳川吉宗より綿百把を贈られることが伝えられる。この贈物は高松藩主の讃岐守松平頼豊に托され、九月二日に江戸を発った。（基熙・実紀）
●九月十日、『金剛般若経』（隷書体）及び『妙法蓮華経』「提婆達多品」を書写。（遺墨・『近衛家熙公遺墨展覧会目録』）
●十月七日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）
●十月十一日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び久米元察。（御茶湯）
●十月十八日、茶の湯を催す。客は差次蔵人錦小路頼庸及び修理亮進藤長富。（御茶湯）
●十一月七日、天英院より内々に金五百両を贈られる。（雑事日記）
●十一月十三日、巳刻、常君（尚子）が入内、中御門院の女御となる。十九日には江戸城に群臣が登城し、尚子の入内を祝った。（基熙・『続史愚抄』・実紀）
●十一月二十一日、尚子入内の慶賀使として館林藩主の出羽守松平宣維・高家の対馬守中条信実・天英院用人の丹波守堀正勝

が上洛。尚子入内の祝儀として、将軍徳川吉宗より太刀・銀百枚・時服十を贈られる。（『中御門天皇御即位次第』・実紀）

●十二月一日、女御尚子に所領を贈られた礼として、将軍徳川吉宗へ太刀・紗綾・馬代を贈る。（実紀）

●十二月三日、茶の湯を催す。客は吉田右近及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）

●十二月十四日、茶の湯を催す。客は石川宗顔及び鴻池道億。（御茶湯）

●十二月十五日、茶の湯を催す。客は京都代官の小堀仁右衛門克敬及び大工頭の中井主水正豊。（御茶湯）

●十二月十七日、諷誦願文の下書（二通）を行う。（『近衛家熙公遺墨展覧会目録』）

●十二月二十日、茶の湯を催す。客は権中納言六条有藤及び参議風早公長。（御茶湯）

●十二月二十一日、茶の湯を催す。客は大随道機及び百拙元養。（御茶湯）

★此年、琉球人の程順則より清国の孔子廟に生えている槐の根から作った盃一枚を贈られる。この時にまとめられたと思われる『楷盃記』二巻（其一は程順則撰、其二は蔡温文若〔具志頭親方〕撰）が陽明文庫に現存。（秘鈔・『近衛家熙遺墨展覧会目録』）この盃は後世に至っても著名であったらしく、以下に示す逸話が残るほか、昭和十四年九月二十四日から開催された「近衛家熙公遺墨展覧会」（於恩賜京都博物館）にも「楷盃」一個が出陳されていることが確認できる。「近衛豫楽院殿の御許へ、或人もろこし曲阜孔林の楷木をもて作れる杯を奉りければ、是は聖人の廟所に生たるものなれば、遊宴の箸（マヽ）として押弄ぶこと勿体なしとて、かづら盆の上にうつふし、めぐりに白き沙を蒔かせ給ひければ、えもいはずうつくしき盆山にてありしを、彼御家に伝へて今もありとかや」（大炊御門家孝『落栗物語』後編）

★この年に出版された『新題林和歌集』に、家熙詠二十二首が入集。

［以下つづく］

※当稿全体の内容の増加や、『國文學論叢』の投稿規定の変更などに伴い、年譜稿（一）で示した当初の連載予定を変更することとし、今回は享保元年までの年譜を掲載した。以降については適宜区切った上で、あと二回程度の連載を予定している。悪しからずご了承願いたい。

（みどりかわ　あきのり・日本学術振興会特別研究員ＰＤ）